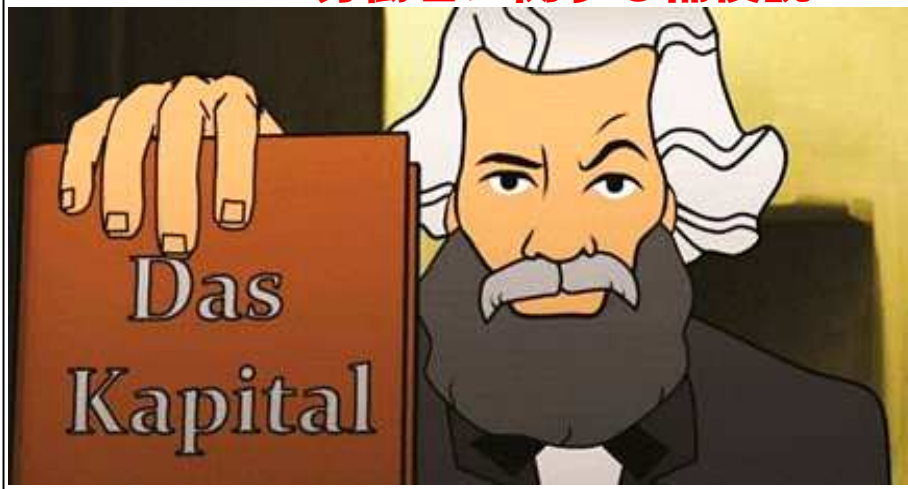


7月学習会への案内です 第41回「資本論を読む会」

第6節 機械装置によって駆逐された労働者に関する補償説



日時：7月28日(木)
午後6時30分

Zoomで開催

今回は「第13章第6節 機械装置によって駆逐された労働者にかんする補償説」(P432～)

選挙期間中にも関わらず6.30に開かれた「資本論を読む会」でした。参加者は地方からの2名を含めて9名でした(選挙活動で遅れて参加した人を含む)。今回の第5節は「労働者と機械との闘争」

「労働者と機械との闘争」ですから、内容は“結論的”には理解できるのですが、やはり歴史的事情は難しいものがありますね。よく知られた言葉でラダイトは「機械破壊者運動」となっています。レポーターのKatoちゃんからは「突っ込みどころ満載のレポート」と謙遜して報告されましたが、良い議論が出来ました。ご苦労様でした。次回は標題にもあるように「労働者への補償」問題ですね。さてどういう議論になるのか楽しみです。次回のレポートはTakちゃんです。

恒例の懇親会は、お酒が入った意見交換ですから、余りよく覚えていませんが、参議院選挙情勢について、ひとわり分析・予測の議論が出てから、ウクライナ・ロシア・北欧情勢など、幅広く意見交換されたように記憶しています。閉会は11時頃だったと思います。次回からも初参加の方歓迎します!

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.cocacn.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから--Katoちゃん

第13章 機械装置と大工業 第5節 労働者と機械との闘争

- ・資本家と賃金労働者との闘争は、分業、協業により雇い主(資本家)が誕生して以来始まり、それはマニファクチャ時代に荒れ続けた。(雇い主は労働者を安く使うために、一方の労働者はそれに抗するために)
- ・その時代、機械が導入されたことにより、労働者は労働手段(機械)と資本の物的存在様式(建物等)を攻撃するようになり、機械破壊者(打ちこわし)運動(ラダイト運動)として現れた。しかし、これら運動は、機械と搾取を混同しており、労働者の攻撃は、物的生産手段(機械、建物等)でなく、搾取形態であることを、まだ理解できていなかった。その理解のためには、長い闘争経験が必要だった。
- ・資本主義的生産は、労働者が労働力を商品として売るということに基づいている。
- ・マニファクチャ当初の分業は、この労働力を一工程の熟練工とした。この工程が機械化されると労働力は不要となり、労働者は労働力を商品として売れなくなる。機械装置により過剰になった労働者が、古い手工業や家内工業等の産業へ押し寄せ、労働市場が溢れて労働力の価格を価値以下に低下させる。
- ・機械装置改良の不変の目的は、労働力を排して、機械装置のみで商品を完成させることである。動力・機械装置・製品の改良、生産増加は、絶えず行われている。
- ・ある作業が、多くの熟練を要する場合、あまりに熟練作業過ぎて不規則(作業時間の長短等)になるから、この作業を規則正しく作業する機械装置群にし、労働者はその監視に充てる。これによって、労働者の才能(熟練度)は、不要となる。機械装置の改良は、熟練度不要(高い者から低い者へ)、年齢・性別不問(成人男性から児童、女性へ)にし、労賃の引き下げとなる。機械装置はたえず成年工を失業に追い込む。
- ・1861年から1868年に338の木綿工場が消失した。これは、より生産的で大規模な機械装置が、より少数の資本家に集中した。機械も減少したが、生産物は増加した。(機械装置の大型化。)生産物は増加したが、従業労働者数は減少した。機械装置の急速で継続的な進歩は、労働者の窮乏化を一時的なものから固定化されたものにした。(P427～P428図表参照)
- ・以降、ユアを筆頭に、「労働者の反抗が機械を発展させた」とか、「機械改良は、貧民階級を抑圧でなく、逆に児童労働の需要と賃金率を上げた」等を行っているが、全て、彼の著書から、無思想的矛盾(整合性のない著述)である。